「調子こいとんちゃうぞ」
　お調子者の弘章に向けて、美海と敦士から突っ込みが入る。この感じがいい、と渚は思う。
「で、美海はどうすんや」
　今度は弘章が美海に問う。
「私はね――」
　渚の方をちらりと見て言った。
「私、渚さんの大学受ける」
「えー！」
　驚く渚を楽しむかのように続ける。
「それでな、環境問題やこれからの、この星の、この島のことについてもっと真剣に考えてみる。それで私も――」
　海に向けて顔を上げ言う。
「私も、この島に帰ってくるわ。大学はそれまでの修行期間」
「なんか、うれしい」
　渚が両手のひらを合わせ感慨に浸っているところに、敦士から横やりが入る。
「どうせ滅びるのに？」
「あー、また言いよる」
　あたたかな笑いに包まれる。
「渚さん、いろんなところに連れて行ってくださいね」
「いいわよー。じゃあまずはしっかり受験勉強しないとね」
　あちゃー！と言って、美海がペロリと舌を出す。
「ほんで美海は戻ってきて何するんや」
　弘章の言葉に、少しだけ真剣さを取り戻し、美海は答えた。
「それで私は――、私は、語り部になる。この島で起こったことを、ちゃんと受け継いでいきたい。広げていきたい。おじいちゃんたちが――」
　説き伏せるような目で敦士を見つめる。そのまなざしをしっかりと受けとめる。
「――おじいちゃんたちが命懸けで遺してくれたものを、ちゃんと受け継いでいきたい」
　――せめて一矢報いたい

　そう言い残し散っていった、多くの島の人たちを想った。
「そうするって、決めた」
　言って今度は、青空を見上げた。
「そんなんで生活できるん？」
「できんようなったら、民宿で雇ってよ」
「何やそれー」
　再び笑いが四人を包む。
「まあ、まかせとけ！」
「あっくんは食料調達、たのんだで！」
　えっ、と虚を突かれながらも、すぐさま反応する。
「美海には敵わんわ」
　少子化の波は収まらない。人口減少も続くだろう。それでも身の丈に合った、その人口に見合った生活を前提にするなら、新しい未来も描けるのではないか。その生活に見合った幸せを前提にするなら、豊かな未来が想像できるのではないか。それは、今まで追い求めてきた未来とは少し違うかもしれない。しかし、今まで見てきた未来だけが良いわけでもなければ、すべてでもない。そう考えれば、少し違った未来も悪くはない。
「できない言い訳を探すんじゃなくって、できる未来を探していこう」
「できる未来――」
　渚の言葉に、敦士が呟く。
　視界の端で何かが動いた気がした。渚が見ると、座っていた草陰からカサカサと小さな蛇の赤ちゃんが顔をのぞかせた。きゃっ、とあげた小さな声に、何事かと三人が覗き込むなり、吹き出すように笑い出した。
「なにびっくりしとん」
「だって、蛇だもん」
「蛇はな、この島では水の神様で、神様の遣いいうて言われとんやで。それにそんなにこんまいし」
　そう言って、なおも三人は笑った。刹那、渚はいつか見た夢を思い出す。赤ちゃん蛇と目が合った気がした。単なる偶然だとかぶりを振り、渚も小さく苦笑いをする。赤ちゃん蛇は、もといたところにカサカサと帰っていった。

夕陽が瀬戸内の海に、ゆっくりと赤く溶けていく。

「じゃあね、みんな。二人は受験勉強頑張って」
「はい。とりあえず頑張ります」
応える弘章に、名残惜しく思う美海が続く。
「次はいつ来ます？」
次かー、と夕焼け空を仰ごうとした矢先、弘章がひと言告げる。
「来週の十三日は、ここで夏祭りやるんやで」
「あ、それいいなーって、十三日か。十三日って――」
そう言って、敦士に目をやる。その意味ありげな目線を不審に受け止め、続きを待つ。
「八月十三日っていえば、流星群」
「あぁ、ペルセウス座流星群」
「そうそうそう、絶対来る。来て展望台で一晩中見る」
言い当てた敦士も、聞いていた二人も呆れ果てる。
「渚さん、なんでそんなこと知っとん」
「へへ、それが知ってるのだよ」
夜空と夜景に、流れるいくつもの星々。想像が膨らみはじめる。
私も見る！と美海。俺も見てみようかなーと敦士。俺も行く！俺も行く！と弘章。結局、翌週も四人は集まることになった。夏のイベントの決定だ。三人に向け、渚がひと声かける。
「もうみんな、仲間だからね」
三人それぞれの笑顔が、大きく頷く。

岸壁から、渚の乗った船を見送る。小さくなっていく船のあとに白く、一筋の航跡が残る。夕陽の光に反射し、白い沫の縁が薄紫に光る。自分たちの行く先を示すかのように。
「行ってしもうたな」
美海の言葉に、うん、と敦士が小さく応える。
「あ、そういや」

そう言って、思い出したように、美海が敦士に言う。
「おばあちゃんが、今年のお盆はうちに来てご飯でも食べないかって。おばさんと一緒に」
突然の誘いに、敦士は天を仰ぐ。
あの日以来、互いの家族同士は連絡のやりとりをするようになった。それは、祖母節子の心配りによるものだ。節子にとって敦士は、実の孫だ。これまでの空白を埋めたい思いを感じる。それは、敦士母子にとってもありがたい誘いだった。
「うん。母さんに言うとくわ」
あたたかいものがこぼれ落ちないように、二度三度まばたきをし、敦士は応えた。
「えー、俺は？俺は？俺だけ仲間はずれ？」
割って入る弘章が、少しの緊張を和らげる。
「ヒロは家族やないやない」
「何言うとるん、家族みたいなもんやないかー！」
「もうー、仕方ないなー」
呆れた三人の笑いが弾む。
「さてと、勉強でもするか」
「なんか、行き先が見えてるいうのは、気持ちがええな」
「何言いよん。まだ何も決まっとらんのに」
二人に向けて敦士が突っ込む。
そうだった、と美海が吹き出して笑う。
「ええな、敦士はもう決まっとって」
「なめんなよ。あれでも植村のおじさん、厳しいんやから」
確かに、と苦笑する。
「私らも負けんから。さあ、みんなでかけ声やろ！はい、みんな手出して」
面倒くさいなーと敦士。それでも三人の輪の中に、三つの手の甲が重なる。
「いくよー、えい、えい――」
合わせた三人の眼が結ばれ、輝きを放つ。笑顔が溢れる。
「おおおー！」
かけ声と同時に挙げられた三本の手が夕焼けに染まり、高々と天に伸びる。

了